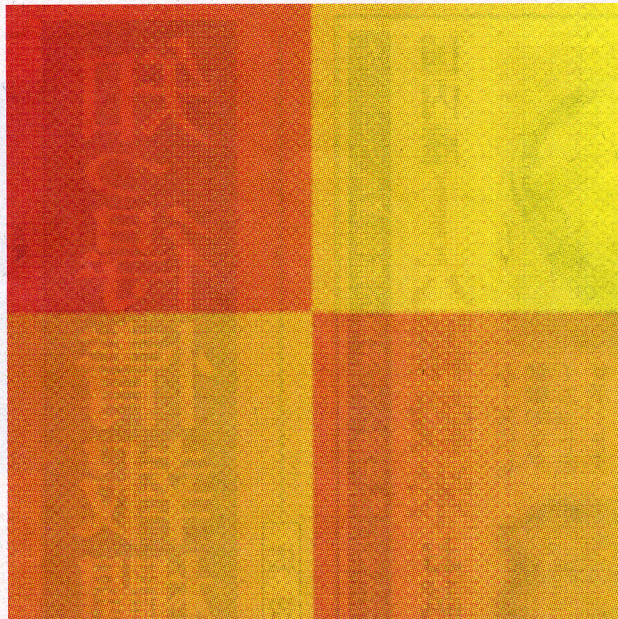


目の冒険

錯視の話 ⑫

北岡 明佳



色・明るさが同じものは？

前々回の「月の錯視」

に対し、「空気の屈折による現象で、錯視ではない」という反応を何通かいただいた。し

かし、屈折による変形が仮にあ

ったとしても、測定される錯視量はそれより多い。

さて、いよいよ最終回である。読者の皆様からいろいろなお便りを頂いた。大別すると「おもしろかった」という激励と「書かれている通りに錯視が見えない。自分の目

が悪いのだろうか」という不安が多かった。

なぜ書かれている通りに見えない場合が多いか、というと、一つには印刷精度の限界がある。

いや、朝日新聞の弁護をすると、これでも予想以上の高解像度と発色の良

の工夫を出し抜いて誤った知覚を起こすのが錯視

図形だからである。つまり、錯視は特定の狭い範囲の条件でしか起きないのである。

また、錯視には大きな個人差がある。他の研究者には見えるが筆者には

見えない方が優れてる？

さを備えていた。それでも、多くの錯視は条件にうるさく、紙面では錯視量が激減してしまう。

なぜ錯視が条件にうるさいかというと、そもそも人間の視覚はものが正しく見えるように(錯視が起きないように)工夫されているところを、そ

見えない錯視もある。個人差の原因はほとんど解明されていない。

しかし、錯視が見えない人の目や脳がよくないということはない。逆に生物としての生存しやすさという点では、錯視が起きにくいということは優れた視覚系であるとも

言える。

最後に、多くの人が見えない錯視を示そう。

先月スペインで開催された国際学会(ヨーロッパ視覚学会)で筆者が発表

してきたばかりの新品だ。四つの正方形のうち二つは色や明るさが同じ

ものである。それは、どれどれか。左上と右下？

それは錯視だ。右上と左下？ それも錯視である。答えは、左上と右下である。

(立命館大助教授)

このシリーズ終わり。来週からは、デザイナーの福田繁雄さんの「だまし絵と半世紀」が始まります。